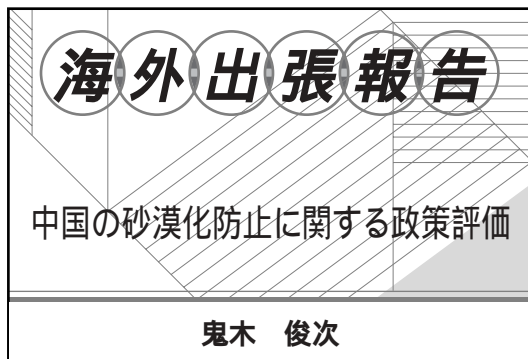




中国の^{オルドス}鄂尔多斯地方は、黄河が大きく北へ湾曲しているところのすぐ南に位置する。今年の3月中旬に、科学研究費研究の一環として、砂漠化の深刻な鄂尔多斯南部を回る機会を得た。ここはもともと緑の多い豊かな土地であったが、農地の開墾や家畜の過放牧、農家による薪木の採取が続いたことで砂漠化が起こったそうである。現在は土地の大半が砂漠に埋まっている。人間の力でここまで自然が変わるのかと思うと、恐ろしささえ覚える。

今回調査した地域の牧畜農家は、砂漠化で貴重な土地の一部を失ったため、厳しい生活を強いられている。そうした中でこの地の農家は以前から自ら砂丘を緑化してきた。高さ1メートルほどのヨモギ（沙蒿）やスナヤナギ（沙柳）、ペキンヤナギ（旱柳）は最も広く植林されている。これらの樹木は、砂の移動を止め、砂丘を緑化するとともに、家畜の飼料や燃料あるいは木材になる。限られた面積の土地を効率的に利用するための工夫である。

ごく最近になって中国の中央政府は本格的に砂漠化防止に取り組むようになった。それは、中国北西部の砂漠化と貧困の連鎖が無視しえない状況になり、また砂漠化地域で発生する砂嵐（黄砂）がたびたび北京を襲うようになったためであると言われている。2004年から、この地域は通年または数ヶ月間の放牧禁止措置（「禁牧」、「休牧」）が実施されることになった。同時に、禁牧または休牧を行う農家に対する食糧や現金の直接支払い政策（「退牧還草」）が始まる。また、2003年より、移民村の建設が始まり、砂漠化の激しい地域の農家を移住させる政策（「生態移民」）が実

施されつつある。砂漠化の激しい地域で作物の栽培を行っているところでは、休耕に対する直接支払い（「退耕還林」）が数年前から行われている。さらに、2004年より農家に対する税金はすべて廃止された。これらの政策のために巨額な財政資金が必要だが、中央政府がそのほとんどを負担している。砂漠化を防止し、農村の貧困を解消しようという政府の意気込みは並々ならぬものである。このような政策は、農家所得を犠牲にせず、砂漠化問題を解決する画期的な政策であり、鄂尔多斯地方ではおおむねうまく行っているように見える。

ただし、こうした政策の評価は、何を評価するかによって結論は変わる。アマルティア・センによれば、経済開発の評価は、単にそれにより所得や財産がどれだけ変化したかということだけではなく、個人の潜在能力、すなわちある人にとって達成可能な機能（なすことができるもの）の組み合わせがどのように変化したかということを見る必要がある。この観点から言えば、砂漠化防止に関する政策にも検討すべき課題が残っている。たとえば、退耕還林や生態移民によって従来の生活様式を放棄した場合に、新しい環境でその人が価値あると思う生活をする自由がどう変わるのかということの評価しなければならない。単に所得についてだけではなく、そこに生きる人々の潜在能力全般を評価することが大切である。そう考えれば、たとえば、現地の農家がこれまで行ってきた緑化技術を生かしながら、技術指導や教育によって緑化を進めるというやり方もある。黄河周辺の植林事業に対して、わが国も膨大な支援を行ってきたが、今後の支援についてそこで生活する人々の潜在能力の観点からどのような方法が求められているか考えていってもよい。

今回の出張では、鄂尔多斯の厳しい環境の中で精一杯生きる農家の人たちや政策担当者たちと語り合ううちに、この地域の環境問題に対する政策評価のあり方そのものについても考えさせられた。